

「対人関係における行動傾向の類似性と親密性の相関関係」*

脇 本 忍
藤 原 武 弘

I. 問 題

これまで、対人関係における好意や魅力の規定因として、近接性、身体的魅力、類似性、相補性、好意の返報性などが指摘されてきた。たとえば Segal (1974) は近接性と親密性の関係を明らかにした。すなわち、学生に対して親密性の高い友人の報告を求めたところ、日頃に接触頻度の高い、出席簿(アルファベット)順での座席に近い友人を最も多く報告した。また Zajonc (1968) は、ただ単純に繰り返し接触するだけでも好意を増すことを文字や顔写真を刺激対象とした実験で明らかにしている。このように接触を繰り返すことで対象となる人物の熟知性が高まったり、好意に発展する現象を彼は単純接触仮説と呼んでいる。また、身体的魅力が好意に及ぼすことを実証したものとしては次のような研究がある。Walster, Aronson & Abrahams (1966) は、コンピュータ・ダンス・パーティー実験を行った。被験者には、男女ペアはコンピュータが無作為に組み合わせたものと告げられていたが、事前に参加者の身体的魅力を調査し、実験的に統制が行われていた。マッチング仮説を検証するのが研究の主要な目的だったのだが、魅力に大きな影響を及ぼしたのは、ペアの相手の身体的魅力のみであった。次に類似性が魅力に及ぼす効果を明らかにした研究を紹介しよう。Cattell & Nesselroade (1967) は安定した結婚生活を営んでいる夫婦と不安定な状態の夫婦に対して質問紙調査を行った。その結果、安定した夫婦は不安定な夫婦に比べて、2人の人格が類似していることが明らかになった。また Byrne & Nelson (1965) は、被験者

と態度が類似した仮想の相手に魅力を抱くことを明らかにした。これら類似性に対して、相補性こそが好意や魅力の規定因であると主張するのが Winch, Ktsanes & Ktsanes (1954) である。彼らは愛を『異性で同世代の人から、重要な心理的要求についての満足を抽出する経験』と定義した。夫婦間の魅力について、支配性の高い人は自分と同じように支配性の高い相手ではなく服従性の高い人に、サディスティックな人はマゾヒスティックな人に、援助をするタイプの人であればそれを求めるタイプの人に、すなわち相補の関係のある相手にひかれるだろうと述べている。Kerckhoff & Davis (1962) は大学生のカップルを対象に、価値観の一致と要求の相補性が結婚に向かっての進展と正の相関があるかどうかを検討する調査を行った。その結果、価値観の一致は交際期間が18ヶ月以下の短期間群で進展と有意に関連していた。そして要求の相補性は交際期間が18ヶ月以上の長期間群で進展と有意に関連していた。Murstein (1971, 1987) はこのような交際期間の推移による対人魅力の規定因の変化を2者間の交際期間により3段階に区別した。彼は初期段階はお互いに刺激(stimulus)が決定因であり、しだいに価値観(value)の類似性が重要になり、さらには2者間でのお互いの役割(role)の適合性が問題になるというSVR理論で説明している。また山中(1995)は入学後1ヶ月を経た新入生の大学生に対し、入学後の友人との親密化過程についての面接調査を行った。その結果2者間の親密化過程では出会いの初期に「帰る方向が同じである」「推薦入学で合格した」などの些細な類似性に基づいて友人選択が行われることが明らかになった。こうした研究結果は、対人関係の初期過程においては

*キーワード：客観的類似性、親密性

類似性が魅力の主要な要因であることを示唆している。

また Berscheid, Snyder & Omoto (1989) は実際に行った2者間の行動から親密さを測定することを試みている。共に過ごした時間 (frequency)、共に行った行動の種類 (diversity)、お互いに与える影響力 (strength)、これらが持続している長さ (duration) と、2者間の親密性との関係を明らかにするために、質問紙調査を行い、恋人・友人・家族など2者間の関係性の相違と各項目との関係を報告している。恋人関係の2者間には時間・種類・影響力ともに強い相関関係があり、友人関係では時間と種類、時間と影響力に、家族関係には時間と種類のみに関係があることが明らかになった。

このように対人関係での好意や魅力の規定因について数多くの研究がなされてきたが、とりわけ態度の類似性は対人魅力の強力な規定因であり、Byrne (1971) によって一連の実証的研究が行われてきた。彼が主として扱ってきた独立変数は類似性の認知であった。仮想の人物と自分の態度が類似していると認知すればするほど、従属変数としての仮想の人物への親密性が増大するというものである。Heider (1958) のバランス理論に従えば、類似した他者に魅力や親密性を感じる事が、心理的に緊張のない安定した状態を得られるといえる。また、Festinger (1954) の社会的比較理論では、類似した他者を自己との比較対象に選択し他者を好意的に評価するからと説明できる。これらのことから、態度の類似性は好意や魅力の規定因として重要な役割であることが確認できる。

しかし、類似性の対象となる特性には態度のみならず、個人のあらゆる特性を対象にすることが可能であろう。例えば、吉田 (1972) は友情についての研究で人格の類似性に注目している。さらに、自己概念、経済水準、能力、身体条件、情緒状態など類似性に関わる多くの特性が類似性の対象となり得ると推測される。

本研究においては、客観的な2者間の類似性と魅力や親密性との間に果して関係がみられるかどうかを検討する。何故なら、認知された類似性と親密性との関係については前述したように数多くの研究が存在するからである。日常の行動傾向の

客観的な類似性と相手に感じる魅力や親密性との間に有意な関係が存在するか否かということであり、さらに親密性や魅力の測定を言語報告のレベルでとらえるだけでなく、行動のレベルで観察されるのかどうかをも明らかにすることを目的としている。

続 (1964) は結婚適性に関する研究の中で、「いかにもその2人なら、お互いに補い合い、助け合い、支えられ合って、いい家庭を作っていくであろうと予想されるような徴候」(p.148)を「相性」と定義した。彼はすでに離婚したカップルや夫婦の要求不満、さらに結婚した人や結婚しようとしている人の結婚の条件などを調査した。その結果、「最も重要なのは精神的、心理的側面であり双方のパーソナリティーであった」(p.148)と述べている。さらに続は2者間の日常行動の傾向性と類似性の関係を検討するため「本人が自覚しているか、反省して気づくことができるような、日常生活における行動の傾向であって、判断して答える際に、なんらかの価値観によって、事実をゆがめて答えるおそれのない」(p.158)100の質問項目からなる質問紙を作成し、全国の大学から選抜した14の大学に在籍する心理学系の教授、助教授、講師全員を対象とする調査を行った。回答から相互の類似度を算出してその結果を各大学の心理研究室に返送し、日頃から調査対象者をよく知っている教員や大学院生に納得できるものかどうかの判定を求め数種類の計算方法で妥当性を確認したところ、65%から74%が妥当であると認めたことが明らかになった。Byrneの扱った変数が、認知レベルにおける類似性に限定されていたのに対し、本研究は客観的レベルにおける行動の類似性であっても、親密性や魅力との間に関係がみられるかどうかを実証的に検討する。本研究の目的は、ある意味では調査対象者が意識していない相手との類似性であっても、どのようなメカニズムで相手への親密性や魅力へと関係していくのかを実証的に明らかにすることで、「相性」の心理的測定と、そのメカニズムの解明をめざすことにある。

・仮説1

客観的に日常の行動傾向の類似性が高い2者

は、言語報告レベルの親密性においても高いものと予測される。

・仮説2

客観的に日常の行動傾向の類似性が高い2者は、行動観察レベルの親密性においても高いものと予測される。

II. 調査1

・方法

1. 被験者

同じゼミに所属する大学生15名(男子5名・女子10名)を対象に質問紙法、及び観察調査法により実施した。

2. 手続き

A. 2者間の類似性の測定:

100項目からなる日常の行動や嗜好についての質問紙への回答を求めた。質問項目は、統(1964)のTest DELB-B形式を用いた。

B. 言語報告レベルの親密性の測定:

成員すべての名前が書かれた質問紙で、本人以外の14名とのそれぞれの親密さの評定を7段階評定尺度によって求めた。

C. 行動観察レベルの親密性の測定:

教室における着席位置の観察、及び調査対象者

から主に座る場所についての報告を求めた。

・結果

1. 被験者AとB、AとC…NとOまで105通りある2者間について、各項目での回答得点差を2乗後、各項目総和により、各被験者間の距離を測定した(表1参照)。

2. 各被験者間の距離と言語報告レベルの親密度の相関関係を求めた。

被験者間の距離 $M=25.98$ $SD=3.13$

親密度両者合計 $M=9.65$ $SD=2.23$ $r=-$

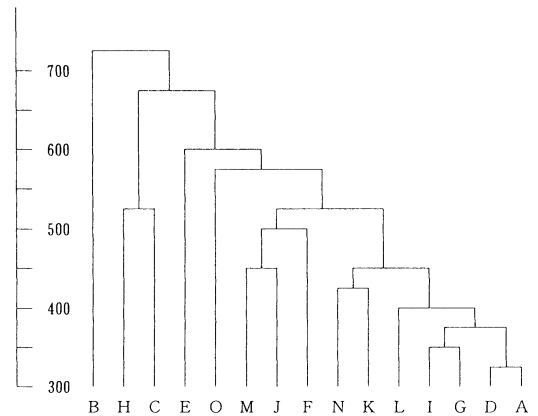


図1. クラスタ分析の結果

表1. 被験者間の距離得点ならびに親密度得点マトリックス

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
A		428	449	463	519	561	333	628	424	473	391	327	516	380	571
B	7		595	615	753	837	509	756	654	649	675	603	870	674	631
C	7	10		686	860	776	532	711	555	607	552	624	729	641	590
D	7	10	10		758	760	666	835	541	628	778	618	703	651	646
E	6	4	7	6		906	646	883	663	732	820	756	835	811	1002
F	7	7	8	9	6		722	955	699	932	814	692	913	745	896
G	7	9	10	9	5	9		795	589	530	544	408	641	557	594
H	5	8	11	8	3	7	7		930	829	757	835	916	630	703
I	9	11	10	11	6	8	11	6		635	651	553	710	566	635
J	6	8	9	8	13	7	10	5	8		826	572	607	665	776
K	8	11	10	11	5	7	10	8	10	8		556	793	681	686
L	7	9	12	10	8	9	10	8	9	8	12		559	549	640
M	8	10	10	10	5	9	9	8	10	10	12	12		708	705
N	6	8	8	7	3	7	7	5	8	5	7	11	10		675
O	7	10	10	10	5	8	10	8	10	9	11	10	10	8	

* 親密度得点は2者間の評定値合計を示した。

** 右上は距離得点、左下は親密度得点を示した。

048 ($df=103, n.s.$) という結果を得た。

3. 各被験者間の距離マトリックスを最短距離法でクラスター分析した結果が図1である。

クラスター分析の結果、グループIにA~L、グループIIにK~M、グループIIIにO~H、グループIVにBと分別できた。

4. さらに各被験者間の距離マトリックスを多次元尺度構成法で分析した(図2参照)。

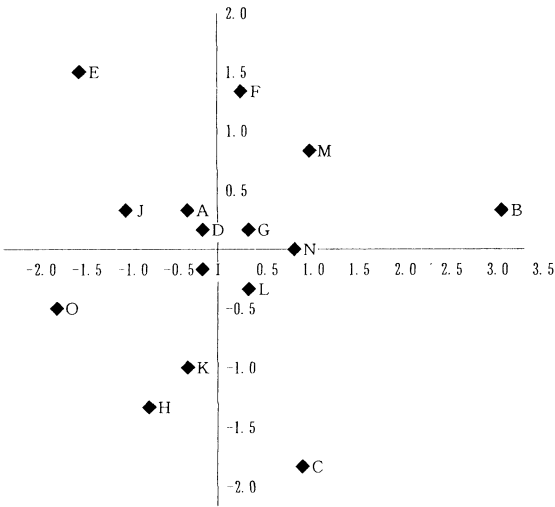


図2. 多次元尺度構成法での分析プロット

5. 座席位置の観察調査から図3の結果が得られた。

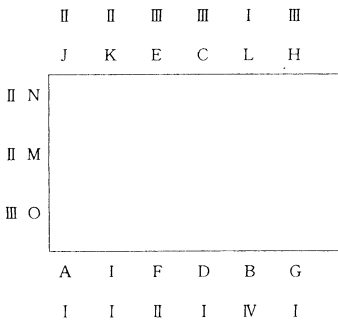


図3. 観察による実際の着席位置

同グループ構成メンバー同士が、隣に席を確保する実測値を求め、さらに同グループメンバーが隣の席にくる期待値を算出して比較し、実測値と

期待値の差を検定した。実測値は左右どちらかの席におなじグループの構成メンバーがいれば1、両側にいれば2、いなければ0とした。期待値は、「 $(n-1) \times 2/14$ 」に各グループの構成メンバー数(グループI・5名、グループII・5名、グループIII・4名、グループIV・1名)を代入し求めた。その結果が表2であるが、有意差はみられなかった。

表2. 座席位置の実測値と期待値の比較

		実測値	期待値
グループ I	A	1	0.57
	D	0	0.57
	G	0	0.57
	I	1	0.57
	L	0	0.57
グループ II	K	1	0.57
	N	2	0.57
	F	0	0.57
	J	2	0.57
グループ III	M	1	0.57
	O	0	0.43
	E	1	0.43
	C	1	0.43
グループ IV	H	0	0.43
	B	0	0
平均		0.67	0.49
標準偏差		0.70	0.15
$t=0.96 (df=28, n.s.)$			

III. 調査2

・方法

1. 被験者

同じゼミに所属する大学生15名(男子4名・女子11名)を対象に質問紙法、及び観察調査法により実施した。

2. 手続き

調査1と同じ。

・結果

1. 被験者AとB、AとC・・・NとOまで105通りある2者間について、各項目での回答得点差を2乗後、各項目総和により、各被験者間の距離を測定した(表3参照)。

表 3. 被験者間の距離得点ならびに親密度得点マトリックス

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
A		829	819	359	698	663	419	747	429	610	610	554	615	609	645
B	9		976	894	1039	966	772	1061	844	1071	967	719	880	844	982
C	8	8		728	965	786	718	780	588	798	659	687	960	722	848
D	13	12	9		703	610	376	670	386	559	561	445	516	522	540
E	5	9	10	11		763	645	879	551	820	780	624	839	801	899
F	11	9	7	13	8		550	854	568	697	735	587	666	678	818
G	8	10	9	13	10	11		596	390	559	545	427	492	538	636
H	10	13	9	11	7	11	12		600	713	609	581	818	742	814
I	14	9	9	13	6	11	9	11		459	487	415	588	494	630
J	7	11	9	10	13	6	9	13	11		758	544	585	619	815
K	8	11	8	9	13	7	6	13	10	14		526	805	571	657
L	9	7	9	8	10	6	9	9	10	12	10		711	607	807
M	10	7	10	11	10	8	9	8	10	7	8	8		590	740
N	7	10	7	8	6	6	6	12	7	12	11	7	12		788
O	14	11	9	13	6	11	8	11	14	10	8	11	13	12	

* 親密度得点は 2 者間の評定値合計を示した。
 ** 右上は距離得点、左下は親密度得点を示した。

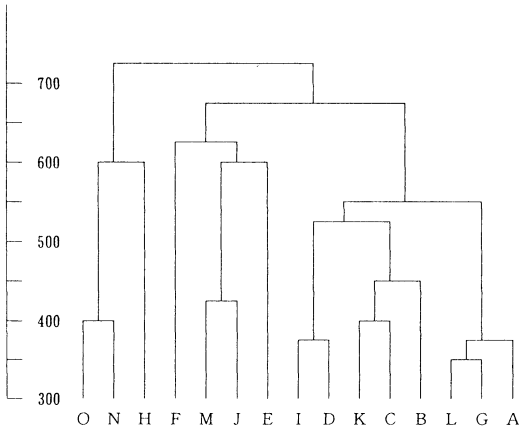


図 4. クラスタ分析の結果

2. 各被験者間の距離と言語報告レベルの親密度の相関関係を求めた。

被験者間の距離 $M=25.70$ $SD=2.78$

親密度両者合計 $M=8.34$ $SD=2.04$ $r=-.022$ ($df=103$, $n.s.$) という結果を得た。

3. 各被験者間の距離マトリックスをウォード法でクラスタ分析した結果が図 4 である。

クラスタ分析の結果、グループ I に A~L、グループ II に B~I、グループ III に E~F、グループ IV に H~O と分別できた。

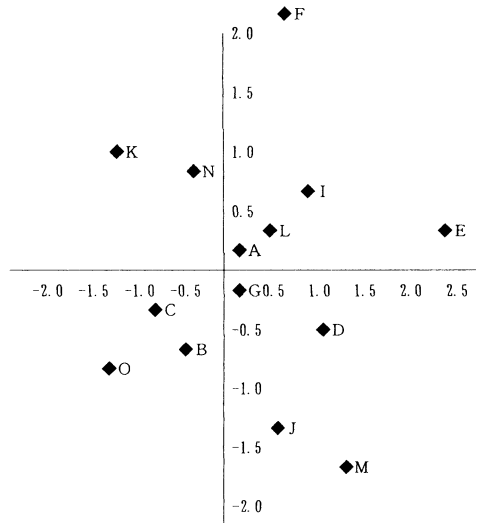


図 5. 多次元尺度構成法での分析プロット

4. さらに各被験者間の距離マトリックスを多次元尺度構成法で分析した (図 5 参照)。

5. 座席位置の観察調査から図 6 の結果が得られた。

調査 1 と同様の方法で着席位置を数値化した。期待値は、「 $(n-1) \times 2/14$ 」に各グループの構成メンバー数 (グループ I ・ 3 名、グループ II ・ 5

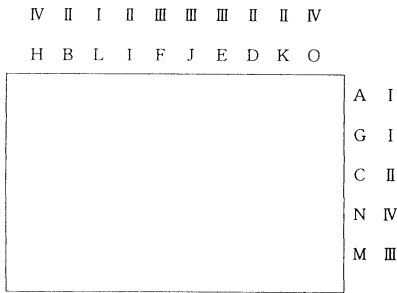


図6. 観察による実際の着席位置

表4. 座席位置の実測値と期待値の比較

		実測値	期待値
グループ I	A	1	0.33
	G	1	0.33
	L	0	0.33
グループ II	B	0	0.57
	C	0	0.57
	K	1	0.57
	D	1	0.57
グループ III	I	1	0.57
	E	1	0.43
	J	2	0.43
	M	0	0.43
	F	1	0.43
グループ IV	H	0	0.33
	N	0	0.33
	O	0	0.33
平均		0.60	0.44
標準偏差		0.61	0.10
$t=1.05 (df=28, n.s.)$			

名、グループⅢ・4名、グループⅣ・3名)を代入し求めた。その結果が表4であるが、有意差はみられなかった。

IV. 調査3

・方法

1. 被験者

同じゼミに所属する大学生16名(男子3名・女子13名)を対象に質問紙法、及び観察調査法により実施した。

2. 手続き

調査1と同じ。

・結果

1. 被験者AとB、AとC・・・OとPまで120通りある2者間について、各項目での回答得点差を2乗後、各項目総和により、各被験者間の距離を測定した(表5参照)。

表5. 被験者間の距離得点ならびに親密度得点マトリックス

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P
A		440	657	797	713	753	710	596	525	597	713	652	563	737	371	364
B	13		522	681	558	532	507	480	440	427	560	504	492	637	264	307
C	10	12		706	660	660	617	529	588	652	730	799	752	658	508	409
D	9	11	9		660	886	777	501	652	610	830	969	844	668	640	545
E	12	12	10	10		742	697	611	576	630	714	967	748	810	638	503
F	8	10	8	7	10		613	575	532	650	880	727	836	764	670	561
G	13	14	10	9	13	10		520	591	559	881	550	799	687	543	556
H	11	12	8	8	10	11	12		565	441	603	660	655	521	409	352
I	9	10	7	7	8	10	10	11		586	702	751	696	710	476	345
J	10	11	9	9	10	11	11	12	11		736	654	724	590	466	467
K	10	11	9	9	10	9	11	10	9	12		797	630	758	522	477
L	9	10	6	6	9	11	10	9	9	14	11		777	835	493	562
M	10	11	6	6	10	10	11	11	10	12	10	12		884	454	481
N	11	10	9	9	8	7	10	7	7	9	10	8	9		578	545
O	10	10	7	7	9	8	10	8	7	9	9	8	9	13		287
P	10	11	8	8	10	8	10	7	7	9	9	8	9	9	9	

* 親密度得点は2者間の評定値合計を示した。
 ** 右上は距離得点、左下は親密度得点を示した。

2. 各被験者間の距離と言語報告レベルの親密度の相関関係を求めた。

被験者間の距離 $M=24.70$ $SD=2.92$

親密度両者合計 $M=9.59$ $SD=1.70$ $r=-.011$ ($df=118$, $n.s.$) という結果を得た。

3. 各被験者間の距離マトリックスをウォード法でクラスター分析した結果が図7である。

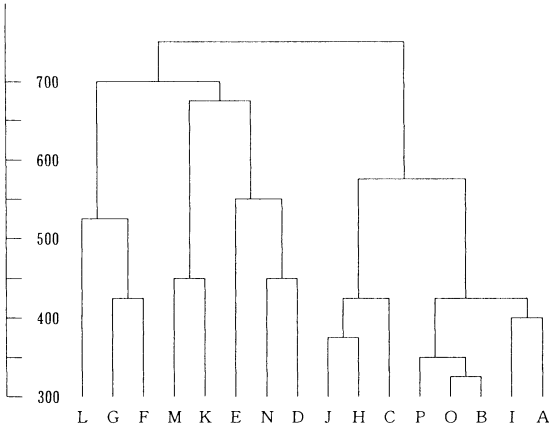


図7. クラスタ分析の結果

クラスター分析の結果、グループIにA~P、グループIIにC~J、グループIIIにD~M、グループIVにF~Lと分別できた。

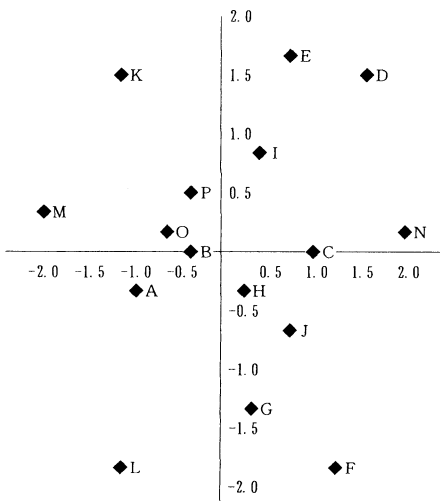


図8. 多次元尺度構成法での分析プロット

4. さらに各被験者間の距離マトリックスを多次元尺度構成法で分析した (図8参照)。

5. 座席位置の観察調査から図9の結果が得られた。

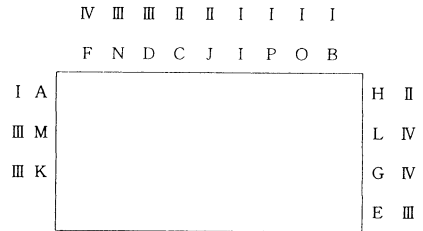


図9. 観察による実際の着席位置

調査1と同様の方法で着席位置を数値化した。期待値は、「 $(n-1) \times 2/15$ 」に各グループの構成メンバー数 (グループI・5名、グループII・3名、グループIII・4名、グループIV・3名) を代入し求めた。その結果が表6である。有意差がみられ、行動傾向の類似性によるものと推測できる。

表6. 座席位置の実測値と期待値の比較

	実測値	期待値	
グループI	A	0	0.53
	I	1	0.53
	B	1	0.53
	O	1	0.53
	P	1	0.53
グループII	C	0	0.27
	H	0	0.27
	J	1	0.27
グループIII	D	1	0.53
	N	1	0.53
	E	0	0.53
	K	1	0.53
グループIV	M	1	0.53
	F	0	0.27
	G	1	0.27
	L	1	0.27
平均	0.81	0.43	
標準偏差	0.63	0.13	
$t=2.54$ ($df=28$, $p < .05$)			

1. 被験者

初対面同士の大学生27名を対象に質問紙法、及び観察調査法により実施した。

V. 調査4

・方法

表7. 各被験者間の距離得点

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	AA
A	0	902	643	601	733	522	695	547	418	596	640	868	533	1040	885	953	841	672	636	933	588	825	529	640	768	438	627
B	902	0	979	939	839	827	887	581	840	856	861	1108	724	952	1019	1059	929	1047	682	1185	1111	763	818	1034	888	825	
C	643	979	0	708	684	692	684	631	621	615	730	679	587	1031	1052	920	762	826	647	1128	542	766	680	689	727	589	752
D	601	939	708	0	516	506	626	554	503	623	584	769	615	997	788	738	670	632	545	950	470	658	572	617	781	439	476
E	733	839	684	516	0	468	668	518	375	620	638	683	471	785	900	720	686	698	575	1004	602	866	464	611	857	627	558
F	522	827	692	506	468	0	652	498	415	603	557	839	514	873	944	662	776	604	625	788	522	766	474	587	933	551	492
G	695	887	648	626	668	652	0	510	539	625	668	655	639	1141	962	814	816	790	657	1040	678	846	466	643	721	625	740
H	547	581	631	554	518	498	510	0	343	529	450	725	513	1013	770	600	644	762	449	910	460	712	464	405	711	539	462
I	418	840	621	503	375	415	539	343	0	484	513	670	386	814	789	627	729	563	446	791	417	685	385	486	654	524	489
J	596	856	615	623	620	603	625	529	484	0	437	734	506	888	773	717	859	697	502	951	603	759	491	470	726	642	723
K	640	861	730	584	638	557	668	450	513	437	0	731	555	949	858	632	740	662	523	950	684	844	494	531	879	645	742
L	868	1108	679	769	683	839	655	725	670	734	731	0	762	1230	1087	933	794	933	820	1195	783	995	711	802	826	728	832
M	533	724	587	615	471	514	638	513	386	506	555	762	0	956	819	769	801	672	530	779	545	697	401	582	612	580	605
N	1040	952	1031	997	785	873	1141	1013	814	888	949	1230	956	0	1179	1269	1239	1095	824	1129	933	1195	865	1088	1084	1082	851
O	885	1019	1052	788	900	944	962	770	789	773	858	1087	819	1179	0	1064	802	896	825	1170	920	1166	545	773	985	795	832
P	953	1059	920	738	720	662	814	600	627	717	632	933	769	1269	1064	0	1010	844	627	990	819	782	610	1397	953	795	972
Q	841	929	762	670	686	776	816	644	729	859	740	794	801	1239	802	1010	0	798	871	1334	836	1003	742	939	636	647	724
R	672	1047	826	632	698	604	790	762	563	697	662	933	672	1095	896	844	798	0	781	904	704	706	601	621	987	743	704
S	636	682	647	545	575	625	657	449	446	502	523	820	530	824	825	627	871	781	0	711	607	703	479	509	794	628	1127
T	933	1185	1128	950	1004	788	1040	910	791	951	950	1195	779	1129	1170	990	1334	904	711	0	970	1088	874	971	1150	839	940
U	588	963	542	470	602	522	678	460	417	603	684	783	545	933	920	819	836	704	607	970	0	700	530	553	751	526	484
V	825	1111	766	658	866	766	846	712	685	759	844	995	697	1195	1166	782	1003	706	703	1088	700	0	744	575	887	813	788
W	529	763	680	572	464	474	466	464	385	491	494	711	401	865	545	610	742	601	479	874	530	744	0	579	695	639	582
X	640	818	689	617	611	587	643	405	486	470	531	802	582	1088	773	1397	939	621	509	971	553	575	579	0	710	628	671
Y	768	1034	727	781	857	933	721	711	654	726	879	826	612	1084	985	953	636	987	794	1150	751	887	695	710	0	708	703
Z	438	888	589	439	627	551	625	539	524	642	645	728	580	1082	795	795	646	743	628	839	526	813	629	628	708	0	629
AA	627	825	752	476	558	492	740	462	489	723	742	832	605	851	832	972	724	708	1127	940	484	788	582	671	703	629	0

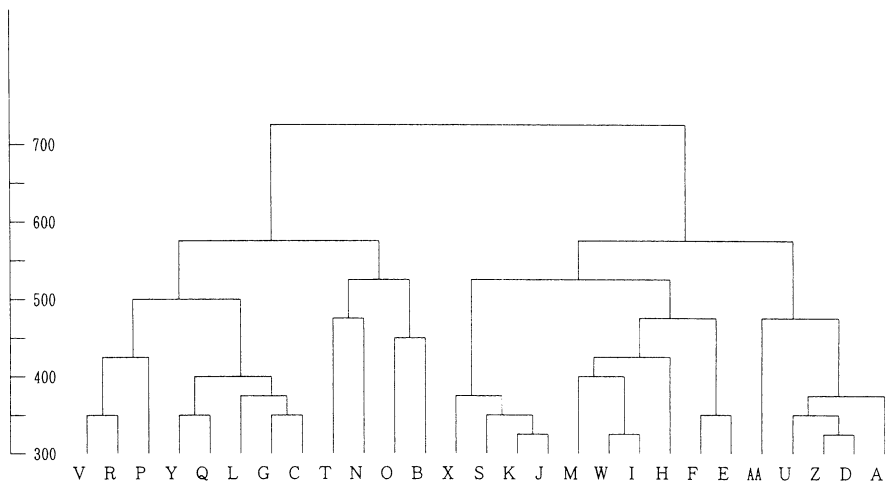


図10. クラスタ分析の結果

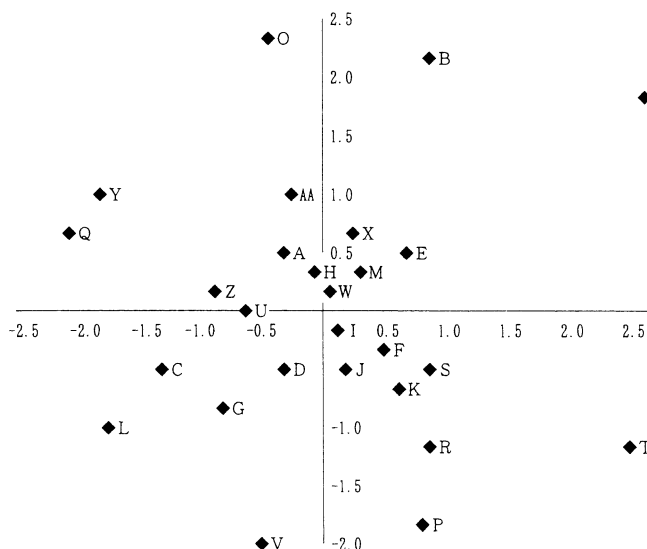


図 11. 多次元尺度構成法での分析プロット

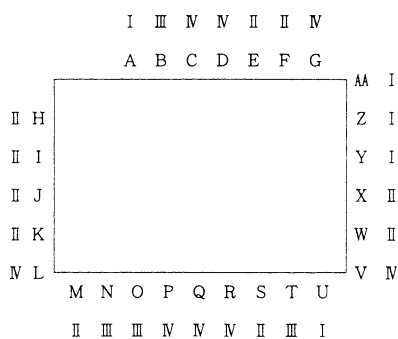


図 12. 観察による実際の着席位置

表 8. 座席位置の実測値と期待値の比較

		実測値	期待値
グループ I	A	0	0.31
	D	1	0.31
	Z	2	0.31
	U	0	0.31
	AA	1	0.31
グループ II	E	1	0.77
	F	1	0.77
	H	1	0.77
	I	2	0.77
	W	1	0.77
	M	1	0.77
	J	2	0.77
	K	1	0.77
	S	0	0.77
	X	1	0.77
グループ III	B	0	0.23
	O	1	0.23
	N	1	0.23
	T	0	0.23
グループ IV	C	1	0.54
	G	0	0.54
	L	0	0.54
	Q	2	0.54
	Y	1	0.54
	P	1	0.54
	R	1	0.54
	V	0	0.54
平均		0.85	0.53
標準偏差		0.65	0.21
			$t=2.63 (df=52, p<.05)$

2. 手続き

調査 1 の A と C の方法を実施した。

・結果

1. A と B、A と C…Z と AA まで 351 通りある 2 者間について、各項目での回答得点差を 2 乗後、各項目総和により、被験者間の距離を測定した (表 7 参照)。

2. 各被験者間の距離マトリックスをウォード法でクラスター分析した。

クラスター分析の結果、グループ I に A～AA、グループ II に E～X、グループ III に B～T、グループ IV に C～V と分別できた。

3. さらに各被験者間の距離マトリックスを多次元尺度構成法で分析した(図11参照)。

4. 座席位置の観察調査から図12の結果が得られた。

調査1と同様の方法で着席位置を数値化した。期待値は、「 $(n-1) \times 2/26$ 」に各グループの構成メンバー数(グループⅠ・5名、グループⅡ・10名、グループⅢ・4名、グループⅣ・8名)を代入し求めた。その結果が表8である。有意差がみられ、行動傾向の類似性によるものと推測できる。

VI. 考 察

本研究においては、日常生活における行動傾向の客観的な類似性と相手に対する親密性との間の関係を検討した。Clark & Reis (1988) は、親密性とは2者間で一人がもう一人に対して、自分に関連した重要な感情や情報を表現し、それについての相手の反応の結果が、自分の見解や価値観を認められ大切にされていると感じられる過程であると定義している。「過程」であるからにはそれが発生する初期段階の時期があると考えられる。本研究では座席行動において、他者に近接した位置に座席選択することを親密性の表れであると捉えた。友人や親しい間柄であれば隣席に着席するのは日常経験からも予測でき、座席の近さは親密性の高さを示す指標となるものと推測される。ところで未知のもの同士ではどうであろうか。言葉を交わすまでのお互いが相手を知る手がかりは、恐らく服装・ヘアスタイル・メイク・装飾品・姿勢、さらに表情やアイコンタクトなどを含めた非言語的な手がかりであろう。換言すれば認知できる相手の雰囲気から自己と相手との類似性を推測し、自己と類似性の高い他者に親密性を抱くものと考えられる。Byrne (1971) が示す態度の類似性が魅力の規定因となる要因のひとつとしてあげられる合意的妥当性 (consensual validation) から説明できる。自分と同じ態度の他者は自分の態度の妥当性を確認してくれていると考えられることから、快適な感情反応を生起させやがて親密性を獲得するというものである。このように未知の相手に対しては外貌判断という僅かな情報に頼

る初期段階を経て、自己と外貌的類似性の高い他者の隣席へ着席するという一連の非言語的コミュニケーション行動がおこなわれると推測できる。

調査1, 2, 3では被験者間の類似性距離と被験者が報告した親密度との間に負の関係を予測したが、どの調査においても有意な関係はみられず仮説1は支持されなかった。その理由として、各被験者群が既に人間関係が形成された集団であり、社会的望ましさを意識し、言語レベルでの親密性の報告内容が漏洩することへの不安のため、一様に親密性を高く報告する傾向にあったのではないかと推察できる。今後は、より個別化した対応で調査を実施し漏洩しないという安心感を与えなければならぬだろう。次に、類似性と教室での着席位置との対応関係について観察調査をおこなった。2者間の関係と座席位置についてはいくつかの研究がされている。たとえば Sommer (1965) は大学生を被験者とした実験結果から、協力的な2者は隣に座席を確保しようとし、対立する2者は机を挟んで離れた位置に確保しようとするを明らかにしている。Cook (1970) はさらに被験者の国籍別比較や大学生と社会人との比較を行い、各群とも Sommer と同様の結果を示している。また、Kahn & McGaughey (1977) は、歩行時および着席時での近接性と親密性についての関係があることを認めている。これらの研究は、座席位置の確保という行動が単に物理的に着席するための位置確保に留まらず、他者との関係性に関わったものであるといえよう。さらに、山口と鈴木 (1996) による座席配置が2者間の緊張感と親密感に及ぼす影響についての研究で、親密性が高い座席位置は、2者が席を替わっても相手の見え方が同じである空間的に対称な位置であり、2者間の距離は近ければ近いほど親密性が高いことがわかった。

本研究では客観的に行動の類似性が高い2者は、行動観察レベルの親密性においても高いという仮説の検証のための調査を実施したが、調査1と調査2では無関係であった。しかし調査3と調査4では対応関係がみられ、仮説2は部分的に支持された。こうした結果の違いの原因とも考えられることは、知り合いのレベルの違いである。即ち、調査1と調査2の被験者同士は知り合って3

ヶ月以上経過したグループであり、調査3は知り合って2週間のグループだった。比較的未知のものと対面した調査4は、親密度の影響をあまり受けていないものと考えられ、類似度が高い成員同士は隣の席を確保する傾向にあることが明らかになった。調査4は比較的未知のグループであるから親密度の変数の影響を受ける可能性が低く、客観的類似性が座席行動に影響を及ぼしたものと推測できる。さらに、座席位置の隣の成員を1、2つ隣を2、3つ隣を3、4つ以上離れた席を4と距離を仮に定義し、その距離マトリックスを多次元尺度構成法で分析すると、類似性距離によるクラスター群で分類された結果と類似していることが明らかになった。この結果からも客観的な類似性と行動レベルにおける親密性との間に有意な関係があるものと推測される。特に、初対面者間という過去の人間関係に影響されない条件においては、日常生活における行動の客観的な類似性と行動レベルにおける親密性との相関が顕著に現れるものと考えられるのではないだろうか。こうしたことが生じるメカニズムとして、非言語的な手がかりを基にして相手と自分との間の類似性を知覚・認知したことによるかもしれない。この点については今後の研究課題としたい。

引用文献

- Berscheid, E., Snyder, M. & Omoto, A. M., 1989 The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 5, 792-807.
- Byrne, D., 1971 *The attraction paradigm*. Academic Press.
- Byrne, D. & Nelson, D., 1965 Attraction as a linear function of proportion of positive reinforcements. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 6, 659-663.
- Cattell, R. B. & Nesselroade, J. R., 1967 Likeness and completeness theories examined by sixteen personality factor measures on stably and unstably married couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **7**, 4, 351-361.
- Clark, M. S. & Reis, H. T., 1988 Interpersonal processes in close relationships. *Annual Review of Psychology*, **39**, 609-672.
- Cook, M., 1970 Experiments on orientation and proxemics. *Human Relations*, **23**, 1, 61-76.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-141.
- Heider, F., 1958 *The psychology of interpersonal relations*. Wiley. 大橋正夫(訳)1978 対人関係の心理学 誠信書房
- Homans, G. C., 1961, 1974 *Social Behavior: Its elementary forms*. Revised Ed. Harcourt Brace Javanovich.
- Kahn, A. & McGaughey, T. A., 1977 Distance and liking: When moving close produces increased liking. *Sociometry*, **40**, 2, 138-144.
- Kerckhoff, A. C. & Davis, K. E., 1962 Value consensus and need complementarity in mate selection. *American Sociological Review*, **27**, 3, 295-303.
- Murstein, B. I., 1971 A theory of marital choice and its applicability to marriage adjustment. In B. I. Murstein (Ed.), *Theories of attraction and love*. Springer.
- Murstein, B. I., 1987 A clarification and extension of the SVR theory of dyadic pairing. *Journal of Marriage and the Family*, **49**, 929-947.
- Segal, M. W., 1974 Alphabet and attraction: An unobtrusive measure of propinquity in a field setting. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 5, 654-657.
- Sommer, R., 1965 Further studies of small group ecology. *Sociometry*, **28**, 337-348.
- 続 有恒 1964 適性 中公新書
- Walster, E., Aronson, V., & Abrahams, D., 1966 Importance of physical attractiveness in dating behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **4**, 5, 508-516.
- Winch, R. F., Ktsans, T., & Ktsans, V., 1954 The theory of complementary needs in mate selection: An analytic and descriptive study. *American Sociological Review*, **19**, 3, 241-249.
- 山口 創・鈴木昌夫 1996 座席配置が気分及ぼす効果に関する実験的研究 実験社会心理学研究, **36**, 2, 219-229.
- 山中一英 1995 対人関係の親密化過程に関する質的データに基づく一考察 名古屋大学教育学部紀要 **42**, 127-134.
- 吉田 博 1972 対人魅力の決定因に関する研究(1) 富山大学教育学部紀要 **20**, 63-82.
- Zajonc, R. B., 1968 Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology*, Monograph Supplement, **9**, 2, 1-27.

Correlation between the Similarity of Behavioral Tendency and Intimacy in Interpersonal Relationships

ABSTRACT

Perceived similarity is an important factor for liking and attraction in interpersonal relationships. Although the effects on perceived similarity have been investigated by many researchers, the effects of real or actual similarity have not been examined. The purpose of this study is to investigate the correlation between the real similarity of behavioral tendency and interpersonal intimacy. Behavioral tendency was measured by Tuzuki's Test DELB (B form) and intimacy was measured by self-report and the distance between subjects reflected in the seating arrangements in a seminar class. The main findings were as follows. Firstly, the real similarity of behavioral tendency was not correlated with the self-report measure of intimacy. Secondly, the real similarity was partially correlated with the behavioral measure which was measured by seat arrangements.

Key Words : real similarity, intimacy